

ピアジェ理論における精神分析

—精神分析の認識論—

大浜 幾久子

ピアジェは晩年、フランスの科学ジャーナリスト、ブランギエとの対話の中で、精神分析について次のように語っている。

ブランギエ 間違っているかもしれませんが、フロイトの仕事が先生の役に立ったことはなかったように思えるのですが。しばしば、先生はフロイトを過小評価したとか、退けたとかいう人がありますね。

ピアジェ それには根本的な誤解があります。精神分析に関するこうした非難に対しては、情意一般に関して私が答えるのと同じように答えることにしています。

ブランギエ ええ、前に私たちは、先生のお仕事の中における感情について、というよりはそれがないことについて話したことがありました。

ピアジェ そうですね。私はおそらくあなたに、情意は活動の動力として基礎的なものだと言ったと思います。もし何かに興味をもつことがなければ、何もしないことは当然ですが、それは動力でしかなく、認識の構造の起源ではありません。私の問題は認識なのですから、私が情意の問題に専念する理由はないのですが、これは異論によるのではなく、また、これをいうのは恥ずかしいのですが、全体として私は個人、個人に関することにはあまり興味がないのです。私が、興味があるのは、知能

の発達における一般的な事柄なのに対し、精神分析というのは、本質的に個人の諸状態、個人の諸問題等の分析なのです。

ブランギエ つまるところ、個人としての人間は、不変なものが存在するものとしての人間に比べると、先生の興味をひかないというわけですね。

ピアジェ ええ、そうです、その通りです。ただ、私はずっと精神分析には興味をもってきました！

(Bringuier, 1977, 訳書 pp.127-128)

ピアジェは、80歳を迎えようとする1976年、このように語ったのだが、遙か昔、20歳になるかならないかの頃、すでに精神分析の存在を知っていたと考えられる。1916年9月から1917年1月にかけて書き綴られ、1918年に出版された、哲学試論というべき『探求』(Piaget, 1918)に、フロイト学説に触れられている箇所がみられるからである。この時期、ピアジェは、心理学を本格的に学んではいなかった。しかし、科学的方法で認識論の研究をすすめることを、ライフワークとして見据えていた。その後、60年間にわたりピアジェ理論が構築されていくのだが、その間、ピアジェは精神分析に対して、どのような興味をもち続けたのだろうか。

本稿では、ピアジェ理論の展開にともなって、ピアジェと精神分析との関係が、どのように変化したかを模索してみたい。考察の対象は、ピアジェが精神分析の認識論に何らかのかたちで言及している著作が中心となる。心理学者としてのピアジェが精神分析を退けているときにも、認識論研究者としてのピアジェは精神分析に興味を示していると思えるからである。

I 『探求』の時代

『探求』(Piaget, 1918)は、ルソーそしてアミエルというスイスロマンド(フランス語圏スイス)の作家たちにみられる内省の伝統をひきつぎ、自我のみを対象とした、小説のかたちの日記であるといえよう。20歳になったば

かりのピアジェは、すでに、軟体動物を中心とした研究業績のある生物学者だったが、『探求』の主人公セバスティアンに、科学と信仰の関係、認識論としての科学の価値、科学と道德の関係、社会救済といった根本問題を探求させている。唯一の登場人物セバスティアンがピアジェ自身であったことはいうまでもない。また、探求 (recherche) は、研究の意味もあわせもつことを付記しておこう。

『探求』の時代の精神分析への言及は、全体として、きわめて大雑把なレベルにとどまっている。ピアジェは、「ウィーンの医師が性本能の中にあらゆる無意識的精神活動の基礎があるのを発見したのだが、彼の学派がこの理論を普及させるや否や、初めは正しかったはずの理論が、子どもだましのようなものになってしまったのだ」と、やや戯画的な調子で、フロイト学説を「汎性欲主義」であると決めつけている。おそらく、こうした大雑把なとらえ方は、この時代、ピアジェがまだフロイトの原著を読んでおらず、フルーノワやクラパレードら、スイスロマンズの心理学者の講演や論文を通して精神分析を知ったためであろう。

しかし『探求』には、「昇華」についてなど、注目すべき分析も見出される (Ducret, 1984a)。

われわれは、この学説〔＝精神分析〕がいかにして、性本能が、パーソナリティの下意識的生活ないし愛情生活、言い換えれば純粋な科学的活動ではないものの源泉であるとみなすようになったかを知っている。とりわけ宗教的感情と審美的感情とは、この本能の昇華に他ならないのである。ここで、昇華とは、低い価値しかもたない対象の精神エネルギーを、より高い価値をもつ対象へ転移させることと定義されている。けれども、精神分析は、自らの価値判断の規準を何らもちあわせないのである。もし、宗教的「コンプレックス」が性的コンプレックスに比べてより高い社会的価値をもつとしても、おそらく、より低い個人的価値しかもたないだろうし、もし、さらに高い個人的価値をもつとしても、心理

的観点からはより低い価値しかもたないだろう、といった具合である。これに反し、あらゆる価値を理想的な組織に帰すわれわれにとっては、古典的な精神分析に内在する窮極因を避けるために、学説を反駁することができるのである。(Piaget, 1918, pp.181-182)

さらに、ピアジェは、自らの解決を記している。

昇華された状態は、結局、潜在的に正常な状態、つまり (……) 理想的な状態になるのである。(ibid., p.182)

以上のように、ピアジェは、昇華の概念は価値の序列を認めることを前提としているはずなのに、精神分析では、その対象となる人が価値の序列をもつことは認めているとしても、それを説明しようとはしないことを批判している。そして、こうした精神分析における説明の欠落を埋めようとするピアジェの考察は、ごく短いものではあるが、すでに、ピアジェが一生を捧げることになる「認識の生物学的説明」という意図の中に位置づけられることに注目したい。

ピアジェは、19世紀末から20世紀初頭にかけて現われた様々な哲学思想と科学思想を、1914年前後から読み漁り、批判的に検討した。その目的は、既存の考え方の中から、認識の生物学的説明という自分自身のライフワークにとって、役立ちそうなものを選び出し、邪魔になりそうなものを排除することであった。そして、その結果が『探求』として出版されることになったのだった。したがって、ピアジェによる精神分析への初めての言及は、たとえ全体として大雑把なレベルにすぎなかったとしても、心理学者ではなく認識論研究者としての言及であったことから、これ以降のピアジェと精神分析の関係をたどっていくのに、重要な示唆を与えていると言えるだろう。

II チューリッヒ時代

1918年、『探求』を出版し、また軟体動物の研究によりヌーシャテル大学で理学博士号を得たピアジェは、心理学実験室のあるチューリッヒに行き、科学的心理学を初めて本格的に学ぶことになる。認識の生物学的説明にとって不可欠な、生物学と認識の分析をつなぐものが心理学であることに気づいたからである。

ピアジェは、チューリッヒで、精神分析にも本格的に触れることになる。フロイトの原著を初めて読み、フロイトの影響を受けた学者たちを知る。すなわち、ブロイエル の 指導を受け、またユンクやプフィッツァーらの講義を聞いた。そして、間もなく、『探求』の時代のいささか戯画的な精神分析の理解には、終止符を打つことになった。

ピアジェは翌年の秋、チューリッヒからパリへ移ったが、チューリッヒ時代に精神分析への理解をいかに深めたかを、パリのビネー協会で1919年12月15日に行なった講演「児童心理学との関係からみた精神分析」(Piaget, 1920)を通して知ることができる。

この講演は、かつてビネーの共同研究者であったシモンの依頼によるものであり、当時のフランスにおける精神分析の受け入れられ方を考えると、「ピアジェの精神分析への貢献」(Ducret, 1984b, pp. 702-714)ととらえることもできよう。ピアジェは、教師や教育心理学者たちを前にして、講演の冒頭部分で次のように述べている。

彼 [=シモン先生] から、フランスでは精神分析は、ほとんど知られておらず、勉強しているのは精神科医だけだということを伺いました。そこで、教育学的な精神分析の動向をかいつまんでお話しするのも面白いのではないかと思いました。(Piaget, 1920, p.18)

ピアジェはこの講演で、精神分析のもつふたつの重要な側面をとりだしてみせる。

精神分析の目的は非常に思い切ったものです。その目的とは、人々の無意識の中に、知らない間にその人を導き、その人の意識の現実の中身に影響を与えるような、隠された傾向を見出すことです。こうした傾向には、ふた通りあります。一方で、見出すべきなのは、人々の固有の過去です。(……) もう一方で、役割を明確にすべきなのは、隠された本能です。(……) したがって、精神分析は、一方では、一種の個人史つまりパーソナリティの発生学であり、もう一方では、無意識の理論つまり本来の意味での科学であることになります。(ibid., p.19)

すなわちピアジェにとって、精神分析は、一方で、分析される人々の感情生活の転変を探求することからいうと、歴史学の一分野、一種の「パーソナリティの発生学」にみえる。他方、精神分析が、分析の対象となる人々の具体的で特異な歴史から離れて「無意識の理論」を確立しようとしていることからいうと、一般心理学ないし大学の心理学における一般化の動向につらなることになる。ここで、ピアジェが、第1の側面を全く肯定的に受けとめているのに対し、第2の側面に対しては、ずっと批判的であることを言うべきであろう。

第2の側面に関し、ピアジェが考察を繰り返している問題がある。たとえば『夢判断』(Freud, 1900)における「心的装置」の理論のように、フロイトの考えの中に暗に含まれている一般心理学と、いわば大学の心理学者たちによって自然科学の方法論をモデルに作りあげられた一般心理学の関係の問題である。いったい、心理学本来の研究分野は意識なのであって、無意識の領域は精神分析に任せるべきなのだろうか。ピアジェは、精神分析と知能の心理学との間に、はっきりした境界線を引くことはできないのだと聴衆に向かって言う。

意識と無意識とはあらゆるところで混じりあっており、それも、しばしば解きほぐせないくらい混じりあっています。ですから、精神生活のこ

のふたつの側面を対置したとすれば、したがって精神分析を知能の心理学に無理矢理に対置したとすれば、それは、現実を単純化するためであって、研究の初期にはおそらく役立ったのですが、今日では、それを続ける必要はないのです。(ibid., p.19)

さらに、ピアジェは、この時代すでに「このふたつの学問を引き合わせることを目指す試みには、おそらく将来性があるだろう」(ibid.)と考えていた。

精神分析と知能の心理学の研究対象がこのように重なりあうのだとすれば、次のふたつの結果が導かれることになる。第1に、昇華、抑圧、象徴化など「精神分析が感情の研究において見出した特別なメカニズムは(……)理性の発達にとって重要である」(ibid.)こと。第2に、知能の心理学者は精神分析学者の用いた概念の価値およびその射程について、発言を許さるべきこと。ピアジェは、後に独自の心理学研究を展開していくことになるが、第1の点に関して、その中で一貫して考察を続けたことは明らかである。多くの場合、自分自身で提起した問題との関連からの考察であったが、可能な場合には、変形をとまなう同化が常になされたにしろ、精神分析の考え方との関連からの考察もあった。また第2の点に関して、ピアジェはその権利を放棄することはなかったといえよう。

さて、ピアジェは講演で、フロイト理論の紹介として、夢の形成における欲望の役割、性的発達段階、エディプスコンプレックスの性質などをとりあげ、さらにより批判的に、抑圧、検閲、昇華などの概念を論じている。また、フロイト理論とアドラーやユングの理論との比較も試みられている。その中から最初にとりあげられた夢に関してみておこう。

夢はイメージのかたちの象徴的物語で、そこにわれわれは被験者の無意識的欲望(および恐怖)、それゆえ心的葛藤の核心を見出します。(ibid., p.22)

ただし、ピアジェにとって、象徴化の過程と観念連合の過程の間、したがって無意識の過程と意識の過程の間には連続性があるので、この原則は、次のようなかたちで表した方がよいことになる。

夢は、覚醒時にそれぞれの言葉が新しい表現と連合するような、観念の連合による整然としたシステムであり、その新しい表現が、最終的に、より奥深い心的葛藤の発見に至らせることとなります。(ibid., p.23)

ここで、ピアジェは、欲望と葛藤という精神分析におけるふたつの中心概念をはぐらかしているようにもみえるのだが、これは、精神分析の中心的課題が、ピアジェにとっては副次的なものでしかなかったことを示していると考えられるべきであろう。そして、上記のような定義は、夢に対してだけでなく、「厳密に論理的で客観的ではないあらゆる思考の形態」、すなわち「子どもの思考」や、「空想家、芸術家、神秘家」の思考 (ibid., p.23) にも有用だろうとされる。これは、レヴィー-ブリュールが「前論理的」、あるいはブロイエルが「自閉的」と命名したようなあらゆる思考の形態といってもよく、伝達不可能であることから、科学的思考とは対立すると考えられている。

以上のように、チューリッヒに始まり1919年末パリでの講演に至る「ピアジェの精神分析への貢献」は、「パーソナリティの発生学」の側面ではなく、理論的側面にあり、ジャネなどによる当時の新しい「大学の心理学」を用いて、精神分析の概念のいくつかを修正しようとする試みにとどまっていた。しかし、講演の締めくくりには、ピアジェにとっての前科学的心理学の時代がこれで終わり、ピアジェ自身の科学的心理学が誕生することが予見されていたと思える。

精神分析は無意識の発達について非常につっこんだ学説を提供してくれます。他方、精神発達については、ビネー協会で賛辞をつらねるには及ばないでしょうが、測定法を用いて研究されてきました。しかし、この

ふたつの発達の相関関係は、まだ全く謎にまつまれましたままです。そのことを皆さんに気づいていただければ、うれしく思います。(ibid., p.58)

III ピアジェ心理学の誕生

「象徴的思考と子どもの思考」(Piaget, 1923a) は、ピアジェが1922年9月、ベルリンで開かれた第7回精神分析大会で講演をしたときの原稿に、翌年4月、その後の新しい研究成果を加え、修正した論文である。この講演をめぐる、ピアジェは半世紀後、次のように回想している。

私がフロイトを知ったのは、1922年に開かれた精神分析大会のときでした。私はこの大会で講演をしたのですが、たくさんの聴衆の前で講演をしたときの不安を今も覚えています。フロイトは、私の右手で、ひじかけ椅子に腰かけながら、葉巻をふかしていました。私は会衆にむかって話していましたが、会衆は誰ひとりとして講演者の方を見てはいませんでした。彼らはフロイトだけに注目しており、フロイトが話の内容に満足しているかどうかを知ろうとしていました。フロイトが笑うと、部屋の中の全員が笑い、フロイトがまじめな顔になると、全員が真剣な表情になりました。(Evans, 1973, 訳書 p.51)

ピアジェより40歳年長だったフロイトが、26歳の若者の講演のどこで笑い、どこでまじめな顔をしたのかは、もちろん今や知る由もない。

ピアジェの講演の目的は、もはや1919年パリでの講演のときのように、精神分析の概念に修正を加えることではなく、象徴的思考と子どもの思考との間にみられる、とりわけ「構造」と「作用」のアナロジーを明らかにすることであった。より正確に言うならば、ピアジェが考察しようとするのは、子どもの象徴的思考と成人の象徴的思考(夢、神話など)との間のアナロジーではなく、象徴的思考一般と子どもの知能との間のアナロジーである。ピアジェは、子どもの知能そのものが、その構造から、まだ象徴性の論理の性質

をもっており、したがって、子どもの思考は象徴的思考と成人の論理的思考の中間に位置づけられるものであることを、明らかにしようとした。

「チューリッヒ時代」以後、ピアジェはまずパリで、次いでジュネーヴのルソー研究所で、子どもの思考に関する研究を重ねていた。後に、『子どもの言語と思考』(Piaget, 1923b) 及び『子どもの判断と推論』(Piaget, 1924) の2冊にまとめられることになる研究である。ピアジェは、これらの研究でひきだすことのできた、子どもの思考の主要な特性をとりあげ、それが、精神分析によって明らかにされた象徴的思考の中に極端なかたちで見出されること、逆に言えば、象徴的思考のいくつかの特性が、子どもの思考の中に弱められたかたちで見出されることを、豊富な事例をあげながら示していく。

第1に、象徴的思考には、思考の方向づけ、思考の意識化、社会化という3つの特性が欠如しているが、子どもの思考でも、これらの特性が不十分であることをあげている。子どもの思考の特徴がわかり易く示されている例をひとつだけ、ひいておこう。

典型的な事実、ある年齢の子どもは自分自身の推論を内観によって辿ることができないことです。おおよそ7～8歳まで、あるいはそれ以降でも、子どもは歩くときのように推論するのであって、思考の動きも、その組立ても意識化されません。子どもは、出された問いと、それに対して自分の出した答は覚えているのですが、途中を忘れてしまうのです。このことは、特に数学的推論において明白です。たとえば、次のようにききます。「ある場所に行くのに50分かかります。もし自転車で行けば、5分の1ですみます。では、自転車では何分かかるでしょう？」ある7歳の男の子は(5を引いて)「45分」と答えます。「どうして、45分になったの？」ときくと、「考えたから」と答えます。「ええ、でも、何を考えたの?」「10分に10を足すと、20になって、また10と10と、それにまた5を足して、45」等々です。どの答も多かれ少なかれ似通っています。

こうした答は、我々が明らかにしたように、立証しようとする欲求によるものでも、何らかの学校の習慣によるものでもありません。子どもは、自分のした推論（5分の1＝5を引かなくてはならない）をどうしても見つけ出せないのです。自分自身の推論を意識化できないので、得られた結果から出発し、どんな方法であれ、その結果を再構成するのです。（Piaget, 1923a, pp.282-283）

第2に、ピアジェは、象徴的思考に認められる自我と非我の混同が、子どもの思考の中に弱められたかたちではあるが、みられることを示す。今日では広く知られている、次のような臨床法による事例があげられている。

子どもに「君には兄弟がいますか？」とききます。その子が「はい、ポールです」と答えたとすると、次のように、またききます。「それでは、ポールには兄弟がいますか？」すると、9歳までの子どもは、ほとんど「いいえ」と答えます。ある男の子は、私たちに「ぼくの家で兄弟がいるのは、ぼくだけです」と言いました。（*ibid.*, p.289）

ピアジェは、このようにすべてを自己の視点からしかとらえられないことを、フロイトが夢をみる者の「ナルシシズム」と呼んだのに倣い、「知的ナルシシズム」と呼んでいる。

第3に、ピアジェは、「圧縮」と「置換」という象徴的思考の特徴の対極にあるのは、「一般化」と「抽象」という論理過程であるが、子どもの思考は、これら両極の中間の「混同心性」であることを示す。

たとえば、子どもに10の諺と、その意味を表す10の文のリストを提示し、それぞれの対応をたずねるような簡単な実験を試みる。ある8歳8か月児は、《Le chat parti, les souris dansent.》（猫が去り鼠は踊る＝鬼のいぬ間の洗濯）という諺を、「大騒ぎをするが、何もしない人たちがいる」という意味にとる。なぜなら、猫は鼠を追いかけて大騒ぎしてから、休むために行っ

てしまって、もう何もしないからだという。このような推論の特徴は何だろうか。リストを提示された子どもは、語や音などに何らかの共通点があるように思える諺と、諺の意味を表す文とを、単純に融合しているのである。

子どもは、一方をもう一方の中に投射し、それらを、ちょうど自閉性がふたつのイメージをひとつに「圧縮」するように圧縮し、また、諺の強調点を与えられたひとつのイメージへ「置き換え」ているのです。つまり、子どもはイメージを作りあげる作業に専念しているのであって、これは、まさに、「圧縮」と「置換」という除去することなく混同する作業と、論理的一般化および抽象化という真に総合する唯一の作業との中間であることとなります。(ibid., pp.293-294)

第4に、ピアジェは、象徴的思考と子どもの思考の構造的特性の比較を試みる。すなわち、無意識におけるシンボルの「多元決定」と、矛盾に対する無関心という、象徴的思考の特徴が、子どもの思考の中にも弱められたかたちで見出されるとする。

たとえば、船が水に浮かんでいるのはどうしてか、というような物理的現象の説明を求められた子どもは、ひとつの理由をあげて単純に答えるのではない。たくさんの仮説を並べあげ、そのどれもが正しく、しかも必要だと考えているのである。これは、多元決定から生じる矛盾に、子どもが無関心であることを示している。Bab.という子どもの説明の例をみておこう。

Bab.(7½歳)は、船が水に浮かぶのは、(1)「流れ」があるから、つまり水の運動による；(2)水がたくさんあるから(レマン湖の船を池に置いたら沈むだろう)；(3)船は大きいから(したがって強いから)；(4)船にはエンジンがあるから；(5)港で、船は「くくりつけられている」から、と考えます。またBab.は、港では鎖と水の流れの両方で船が沈まないのだと、はっきり言います。これらの仮説でBab.の頭にあるのは、船の

浮くこと自体の説明であって、そうみえるかもしれませんが、船が進むことの説明ではありません。(ibid., p.296)

最後に、ピアジェは、因果関係および、部分と全体の関係概念 (Piaget, 1921, 1922) の欠如ないし不十分なことも、象徴的思考と子どもの思考に共通する特性であることを示し、全体として、子どもの思考は象徴的思考と論理的思考の中間に位置づけ得るとまとめている。

IV 知能の誕生

研究者と子どもの言語のやりとりに基礎をおいた、以上のような初期の心理学研究が一段落しかけたところで、ピアジェは、その欠点にも気づくようになっていた。そして、知能の発生を完全に理解するためには、まず、乳児がどのように物を取り扱っており、どのように物に対しての経験をしているかを考察しなくてはならないと考えるようになった。幼児期、児童期の言語のやりとりに基礎をおいた研究をする前に、乳児期の行動の図式の研究が、本来、必要なのである。

1925年、ピアジェの長女ジャクリーヌが誕生した。そして、1927年には次女ルシアンヌ、1931年には長男ローランが生まれた。ピアジェは3人の子どもの行動を、誕生の日から約2年間にわたり、観察し続けることになる。この長期間にわたる綿密な観察に、ピアジェの初期の心理学研究に研究員のひとりとして参加していたヴァランティヌ・ピアジェ夫人の協力が大きかっただろうことは、想像に難くない。

ジャクリーヌ、ルシアンヌ、ローランの観察に基づく乳児の認知発達研究は、『子どもの知能の誕生』(Piaget, 1936)『子どもの実在の構成』(Piaget, 1937)『子どもの象徴の形成』(Piaget, 1945)の3冊にまとめられた。3冊あわせると1000ページを越える、壮大な乳児期研究となった。そのキーワードをあげるとすれば、感覚運動知能である。ピアジェは、生誕から言語が現れるまでの、おおよそ1年半ないし2年間を、感覚運動知能期と呼び、認知

発達第1段階であると考え。感覚運動期は、自己と物、あるいは自己と他者とが未分化な唯我論的心性から始まって、自分自身を、他の多くの対象のひとつであり物理的法則に従うものとして、位置づけられるようになるまでの段階である。また、生得的な反射から始まり、言語習得を準備するまでの段階であるということもできる。言語による知能以前に、感覚運動（手を動かし物を取り扱うこと、及び、自分の身体の位置を移動させること、等）による知能の発達が認められるのである。唯我論的心性において、後に主体となるものと対象となるものとの間の結びつきを可能にするのは、感覚運動的活動以外あり得ない。

ピアジェは、感覚運動知能の研究を通し、初めて真に自分の心理学理論をつくりあげたと言ってよいだろう。「シエム（シエマ）」、「同化」、「調節」、「適応」、「分化」、「統合」、「組織化」等々、今日、ピアジェ理論の概念として広く知られている諸概念が用いられるようになる。これらの概念は多分に、象徴的思考および象徴化の過程に関係しており、この時期、ピアジェは必然的に、これらの概念に照らして、フロイト理論とフロイト理論が対象とした諸現象を考察し直すことになった。その成果は、とりわけ、上記3部作の3冊目『子どもの象徴の形成』の中で、詳細に論じられている。この本には「模倣、遊びと夢、イメージと表象」という副題がつけられているが、それからもわかるように、初めの2冊とは、観点も目的もかなり異なっている。すなわち、感覚運動期の模倣と遊びの発達に多くのページを割いているが、本来の目的は、おおよそ2歳以降の言語に代表される象徴機能（厳密には記号的機能）の発達を明らかにすることにある。そして、感覚運動知能が最高点に達する時期にどのようにして、表象的思考が始まるかを考察している。なお、『子どもの象徴の形成』は、1945年に出版されたのだが、実際には、その大部分は1930年代半ばに構想されていたと考えられる。

「シエム」、「同化」と「調節」、等の概念によって、ピアジェは、経験論の認識論の後裔ともいえる、連合主義心理学の用いる概念の枠の中にとどまっていた精神分析学者たちに対して、より説得的で、鋭い批判をなげかけるこ

とができるようになった。その結果、精神分析学者は「シエム」の概念を取り入れ、心理発達の様々な水準ないし段階に特有の機能や手段の独自性を、より適切に抽出することが可能になる。言い換えれば、精神分析学者は、高次の行動に対応する心理学概念を、より低次の行動を記述し説明するのに用いるという、認識論上の誤りを避けることが可能になるのである。

乳児の指しゃぶりを例にしてみよう。精神分析学者の中には、乳児の吸う指を母親の乳房の象徴的「代理」と考える人がある。しかし、この水準では、象徴の概念はまったく必要ないのである。もし、吸うことをひとつのシエムと考えれば、少なくとも母親が子どもの欲求を充たしてやれないときには、吸うことは、その作用を供給する可能性のあるあらゆる対象に、拡張されるのである。より一般的に言うとするれば、子どもに表象活動が成立していなかったり成立不可能なときには、精神分析学者は、イメージの概念を使わずにすまさねばならないのである。

ピアジェにとって、フロイト理論の最大の難点は、構築説の観点と発生的説明の欠落であるとまとめることもできるだろう。

もちろんフロイトは、子どもの発達を無視していたのではない。フロイトによれば、子どもの感情は段階をなして発達するのだが、それは、子どもの発達に応じて、リビドーの向かう対象が変化するからである。すなわち、リビドーが自分の身体に付着する「自体性欲」の時期から、自己全般に向かう「ナルシシズム的リビドー」の時期へ、さらに外界の対象（とりわけ人間）に向かう「対象リビドー」の時期へと、発達する。しかし、リビドーそのものは不変だと考えた。これを、ピアジェが非発生的として批判するのである。しかし、フロイトは、成人の感情の混乱を子どもへの退行によって説明するために、子どもの発達段階を考察したのだった。したがって、フロイトは、リビドーの対象の移動のみでなく、前段階の感情が無意識の中に抑圧されることも強調した。しかも、フロイトは抑圧の概念を一般化し、乳児期の感情的経験の記憶の消失すら、抑圧によって説明しようとする。

ところがピアジェによれば、イメージや言語のような記憶を再構成するた

めに必要な道具は、感覚運動知能期の最後にならないと出現しないのである。すなわち、記憶は初めから固定されなかったと考えなくてはならない。ここでも、精神分析学者は、高次の行動に対応する心理学概念を、より低次の行動を記述し説明するのに用いているといえよう。これは、「ナルシシズム的リビドー」の概念についても同様である。ピアジェによれば、この時期の子どもにすでに自我がそなわっていると仮定すること自体が誤りであり、フロイトのいうナルシシズムは「ナルシスなきナルシシズム」である。さらに、「対象リビドー」もピアジェには容認できない概念である。対象が対象として認識されるには、「対象（もの）の永続性」の概念が成立しなくてはならないことは、『子どもの実在の構成』（Piaget, 1937）で明らかにされた通りだからである。

以上のような、フロイト理論への批判を、ピアジェは後年、次のように、いささか極端な表現で記している。

ところで、実体の観念と力の観念とに基礎を置く一切の心理学的な説明は、古典的な唯心論からどれほど無縁なように見えようとも、それら初時的な諸テーゼに直接、間接、に参加しているのである。かくしてその語のメイエルソンの意味での同一性の科学の見本を心理学において構成しているフロイトの諸理論は、本能あるいは無意識的な諸要素の同一性の下で、この因果的な実体を絶えず再建しており、この因果的な実体が批判的でない諸々の心理学の主要なそして絶えず再生する神話を構成する（我々は《本能》の理論、等々のようなフロイトの一般的な説明的諸理論について語っているのであって、彼が偉大な成功の裡に明らかにした数多くの新たな事実について語っているのではない）。(Piaget, 1950, 訳書 p.193)

V 知能の構造

1930年代の終わりから1940年代の初めにかけて、ピアジェは、感覚運動知

能期の最終段階に始まる表象的思考が、論理構造をそなえた「操作的思考」の段階まで発達していく過程の研究へと向かった。とりわけ、認識における基本概念である、「数」、「量」、「時間」、「速度」、「空間」、「偶然性」などをとりあげ、それらの概念が論理的に操作されるに至る発達のすじみちを明らかにすることに力を注いだ。知能の操作構造を見出し、「群性体」、「群」等によってそれをモデル化することで、ピアジェ理論は、この時期、機能の側面から、発生的かつ構造の側面へ転換したといえよう。その結果、「感覚運動知能期」、「前操作期」、「具体的操作期」、「形式的操作期」という発達段階の概念が重要度を増すことになった。そして、ピアジェは、情意の発達段階と認知発達段階との比較を試み、心理発達において不可分であるふたつの側面の間を並行論を支持する理論を提示することになる。1953-54年度、パリ、ソルボンヌにおける講義である（Piaget, 1954）。

「この講義のテーマは、昨年度、授業中におこなわれたディスカッションをうけて決められました。ディスカッションの中で、私の知的発達研究が主知主義に陥っており、知能を恣意的に切り離してしまっ、知能と情意との関係を見失っているのだ、という批判がでてきました。そこで、本年度の授業では、知能と情意の関係を論じることにします」という、前置きで始められたピアジェの講義は、上述のフロイトに構築説の観点と発生的説明が欠如しているという批判の意味を、より厳密に示したものといえよう。

ピアジェは、情意の発達は大きく「個人内感情」の段階と「個人間感情」の段階にわけられるとする。知能における感覚運動期には、個人内感情、および様々な行動を行なう際の個人内でのエネルギー調整が対応し、具体的操作期およびその準備段階の前操作期には、個人間感情、あるいは個人間のやりとり行為を調整する働きが対応する。後者は、さらに形式的操作期において具体的な個人を越えた集団や社会への感情へと分化していくことになる。

さて、ピアジェは情意と知能とは不可分であり、相互作用しあうことは当然であるとした上で、問題はその関係の仕方にあると主張する。

行動のエネルギーは情意に属するのですが、それに対し、構造は認知機能に属すると言えるでしょう。このように構造とエネルギーが区別されるとすれば、知能と情意とが現実の行動においては常に不可分であっても、我々は両者を異なる性質をもつものとみなさなくてはならないことになります。(Piaget, 1954, pp.6-7)

これを、フロイト理論に対するピアジェの批判として言い換えるとすれば、次のようになる。ピアジェがジャネの心理学を論じた論文の一節をみよう。

ところで、この [=フロイト理論の] 発達段階は、どの場合も、他に可能なものがある中から、優位を占めるある特徴をとりだして定義されているに過ぎない。それでは、この優位性はいかにして測るのだろうか。さらに、これらの発達段階に系統的な統合を介入させることをせず、優位性の連続に甘んじている。この連続そのものについては、その順序は必然ではなく、偶然なのである。たとえば、口唇期が肛門期に先行するのであって、その後が続くのではないのは、このふたつの機能があらゆる水準で同時にみられるのに、どうしてだろうか。系統的統合がないことから、この一覧表は、構築説の意味で発生的なものとは言えないのである。(Piaget, 1960, pp.112-113)

ピアジェのフロイト批判の本質は、パーソナリティおよび情意の構造化には、知能が関わっているはずなのに、フロイト理論には知能が抜け落ちてしまっていることである。なお、このピアジェの批判に応じて、情意を研究対象とする心理学者および精神分析学者の中から、性的発達段階および情意の発達段階の問題に、とりわけ「対象関係」の問題を中心にして、新たに取り組む者がでたことを、記しておこう (たとえば, Gouin-Décarie, 1968)。

さらにピアジェは、「情意の対象」としての他者が重要であり、それによって「認知の対象」の構成が可能になるのだと考える精神分析学者に対して

も、情意が先か、知能が先か、という問題提起そのものが誤りであるとして批判を加えている。

認知の対象と情意の対象とがあるわけではありません。他者というのは、もちろんのこと、最高次の情意の対象ですが、それは同時に、最も興味深く、最も生気に溢れ、最も意外で、最も教訓的な認知の対象でもあるのです。(……) したがって、他者とは、情意の要因のみならず認知の要因が関与する、無数のやりとりを前提とした対象なのです。そして、もし、このふたつの側面のどちらかが他より重要であるのだとすれば、他の側面も同様にそうであるのだと、私は考えます。(Piaget, 1954, p. 66)

ピアジェの情意発達と認知発達の並行論を示す、具体例を最後にひとつあげておくことにしよう。「保存」概念の獲得は、いうまでもなく具体的操作期の指標である。ピアジェは、「情意の保存」といえる発達が並行してみられるとする。ピアジェが考えるのは、価値の保存である。すなわち、この時期、主体や相手や場面の状況が違っているにかかわらず、一定の価値を保存しようとする作用が現れてくる。その作用、つまり認知面の操作に相当するのが、「意志」である。ピアジェは、意志とは上位の情意価値と、下位の情意価値とが葛藤しているときに、下位の価値をおさえて、上位の価値を保存する操作であると言う。そして、これは、たとえば数の保存の課題においても同じであるとする。知覚的布置による傾向と論理的操作による傾向とが葛藤しあい、最初は下位に属する前者の傾向が強いが、最後には上位に属する後者の傾向が優勢になり、現在の知覚的布置を全体の中に位置づけ、脱中心化するという操作を行えるようになるのである。

VI 発生的認識論の展開

ピアジェ学派の研究は、1960年代終わりから1970年代初頭に、大きな転換

をとげる。発生的認識論国際センターを中心とした、ピアジェと共同研究者たちの研究は、1969年度の「意識化」の研究以降、それまでとの対比で示すとすると、次のように変化したのである。すなわち、研究対象の観点からは、認識カテゴリーの研究から認識の一般的機能の研究へ、また研究関心の観点からは、認識論の古典的諸問題の解明から発生的認識論固有の問題である諸認識の拡大のメカニズムへ、そして、構造とその発生の観点からは、構造分析からその発生過程の分析への変化であった。そして、こうした研究活動の一応の結論は、『認知構造の均衡化：発達の中心的問題』（Piaget, 1975）にまとめられることになる。

さらに、この転換は、ピアジェと精神分析の関係にも変化をもたらした。すなわち、ピアジェは、フロイトによって提起された「力動的」な観点にそれまで以上に関心を示すようになったと考えられる。精神分析は、無意識に関して、いわゆる静的な考え方をやめて、力動的な考え方をするようになった。フロイト自身、ジャネとの考え方の違いを次のように表している。

我々は、心的装置が生来的に統合力をもたないということから、精神現象の分裂を考えるのではなく、対立する心的諸力の葛藤によって力動的にそれを説明し、そこにあい争う二つの心的集団の活発な闘争の結果を見るのである。(Freud, 1910, 訳書 p.29)

力動的な見方は、ジャネがすでにそうであったように、力の概念を考慮するだけでなく、精神現象の中では様々な力は必然的にお互いに葛藤するようになるという考えをも含んでいる。そして、心的葛藤はその原動力を欲動の二元性の中に見出す。

ピアジェは、とりわけ「抑圧」の概念に関心を示し、フロイトほどに決定的な地位を与えるわけではないが、それを認知発達の理論に受け入れ、次のように語っている。

ピアジェ（……）私はアメリカ精神分析学会で——この学会がフロイト派の学会としては世界最大だと思います——講演したことがあります。3～4年前のことですが。認知的無意識と情意的無意識に関する講演で、両者の関係を示すのが目的でした。ちなみにこの講演は、フランス語で、『現代理性』誌に載っています。

ブランギエ ということは、知性、知能に関する無意識と、情意に関する無意識との関係ということでしょうか。

ピアジェ そうです。

ブランギエ そのことについて何が言えるのですか。

ピアジェ 認知的な仕事において、また、問題の解決を探求する時に、個人の活動の大多数、多くの部分というのは、活動が成功した時には無意識のままであって、意識化は活動それ自体よりずっとあとになるのです。

ブランギエ ということは、必要がない限り、私たちは意識化を行わないわけですか。

ピアジェ ええ、まさしくそうです。

ブランギエ それでは、情意の方はどうなりますか。

ピアジェ 情意では、そういうこともやはりありますし、さらに抑圧があります。ただ、この抑圧も、それに似たものを認知の領域で見出せます。つまり、子どもでは、科学者でさえもしばしば、ある概念やある理論、特に理論を構築する時に、うまくいかないものを無意識に抑圧しているのです。

ブランギエ 選んでいるのですね。

ピアジェ まさしくそうです。これが、認知におけるフロイトの抑圧に対応するものであって、この講演の中で力説したのです。

ブランギエ システムの中にうまく入らないものは、認めたがらないのですね。

ピアジェ ええ、そうです。

(Bringuier, 1977, 訳書 pp.128-129)

VII 精神分析の認識論

以上に概観したように、ピアジェは晩年まで、精神分析に興味をもち続けた。しかし、『認知構造の均衡化：発達の中心的問題』の時期には、もはやピアジェは精神分析の認識論は語っていない。発達段階の理論を退け、また従来の記号論理学による知能の構造の記述から意味の論理学への挑戦を始めていたピアジェが、再びフロイトを読んだとしたら、構築説の欠如への批判は、少しはやわらいださるうか。

また、ピアジェが、フランス語圏の同時代人、ラカンやリクールの精神分析の認識論 (Lacan, 1966; Ricœur, 1965) について、ほとんど語る事がなかったことは、非常に残念に思える。人文諸科学の認識論に関わる議論が大いに期待できたはずだからである。

本論文では、精神分析の認識論の観点から、ピアジェと精神分析、とりわけその創始者フロイトとの関係を考察した。より大きな課題は、当然、ピアジェ理論とフロイト理論を統合することであり、その試みは、精神分析学者によって、また近年は「大学の心理学者」によって、様々なかたちでなされてきている。しかし、その企てが真に成功するには、精神分析の認識論についても、発生的認識論の認識論についても、さらに研究が必要とされるだろう。

文献

- Bringuier, J-C. 1977 *Conversations libres avec Jean Piaget*. Editions Robert Laffont. 大浜幾久子 (訳) 1985 ピアジェ晩年に語る 国土社。
- Ducret, J-J. 1984a Piaget et l'épistémologie de la psychanalyse: quelques notes. *Archives de Psychologie*, 52, 133-146.
- Ducret, J-J. 1984b *Jean Piaget savant et philosophe: les années de formation, 1907-1924*.

Genève: Librairie Droz.

- Evans, R. I. 1973 *Jean Piaget: The Man and His Ideas*. New York: E. P. Dutton & Co., Inc.
宇津木保(訳) 1975 ピアジェとの対話 誠信書房。
- Freud, S. 1900 *Die Traumdeutung*. Leipzig: Deuticke. 高橋義孝(訳) 1954/1955 フロイト選集
11/12巻 夢判断 日本教文社。
- Freud, S. 1910 *Über Psychoanalyse*. Leipzig: Deuticke. 金森誠也(編訳) 1971 フロイト 性愛と
自我 白水社。
- Gouin-Décarie, T. 1968 *Intelligence et affectivité chez l'enfant*. Neuchâtel et Paris: Delachaux
et Niestlé.
- Lacan, J. 1966 *Ecrits*. Paris: Seuil. 宮本忠雄, 竹内迪也, 高橋徹, 佐々木孝次(訳) 1972 エクリ
I ; 佐々木孝次, 三好暁光, 早水洋太郎(訳) 1977 エクリII ; 佐々木孝次, 海老原英彦, 芦原
眷(訳) 1981 エクリIII 弘文堂。
- Piaget, J. 1918 *Recherche*. Lausanne: Edition La Concorde.
- Piaget, J. 1920 La psychanalyse dans ses rapports avec la psychologie de l'enfant. *Bulletin de
la Société Alfred Binet*. 20, 18-34 et 42-58.
- Piaget, J. 1921 Essai sur quelques aspects du développement de la notion de partie chez l'enfant.
Journal de psychologie normale et pathologique, 18, 449-480.
- Piaget, J. 1922 Essai sur la multiplication logique et les débuts de la pensée formelle chez
l'enfant. *Journal de psychologie normale et pathologique* 19, 222-261.
- Piaget, J. 1923a La pensée symbolique et la pensée de l'enfant. *Archives de Psychologie*, 18, 273
-304.
- Piaget, J. 1923b *Le langage et la pensée chez l'enfant*. Neuchâtel et Paris: Delachaux et Niestlé.
大伴茂(訳) 1954 児童の自己中心性 同文書院。
- Piaget, J. 1924 *Le jugement et le raisonnement chez l'enfant*. Neuchâtel et Paris: Delachaux et
Niestlé. 滝沢武久, 岸田秀(訳) 1969 判断と推理の発達心理学 国土社。
- Piaget, J. 1936 *La naissance de l'intelligence chez l'enfant*. Neuchâtel et Paris: Delachaux et
Niestlé. 谷村覚, 浜田寿美男(訳) 1978 知能の誕生 ミネルヴァ書房。
- Piaget, J. 1937 *La construction du réel chez l'enfant*. Neuchâtel et Paris: Delachaux et Niestlé.
- Piaget, J. 1945 *La formation du symbole chez l'enfant*. Neuchâtel et Paris: Delachaux et Niestlé.
大伴茂(訳) 1968 模倣の心理学 1967 遊びの心理学 1969 表象の心理学 黎明書房。
- Piaget, J. 1950 *Introduction à l'épistémologie génétique. Tome III: La pensée biologique, la pensée
psychologique et la pensée sociologique*. Paris: P. U. F. 田辺振太郎, 島雄元(訳) 1980 発生的

認識論序説 第三卷：生物学思想、心理学思想、および社会学思想 三省堂。

Piaget, J. 1954 *Les relations entre l'affectivité et l'intelligence dans le développement mental de l'enfant*. Paris: Centre de documentation universitaire.

Piaget, J. 1960 L'aspect génétique de l'œuvre de Pierre Janet. *Psychologie Française*, 5, 111-117.

Piaget, J. 1975 *L'équilibration des structures cognitives: problème central du développement*. (*Etudes d'épistémologie génétique, vol. 33*), Paris: P. U. F.

Ricœur, P. 1965 *De l'interprétation: Essai sur Freud*. Paris: Seuil. 久米博(訳) 1982 フロイトを読む 解釈学試論 新曜社。